様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３４４３４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０６０８

研究課題名（和文）海外ノンネイティブ日本語教師のビリーフ変容過程に関する縦断的研究

研究課題名（英文）A Longitudinal Study of the Process of Change in Teachers' Beliefs of Non-Native Japanese-Language Teachers Abroad

研究代表者
坪根　由香里（TSUBONE, YUKARI）

大阪観光大学・観光学部・准教授

研究者番号：８０３２７７３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、タイ人日本語教師の「いい日本語教師」に関するビリーフの形成・変容の過程とその要因を明らかにすることを目指し、新人・中堅教師各2名に対する縦断的調査と中堅・経験教師各2名に対するインタビュー調査を行った。その結果、ビリーフには、学習者体験、研修、学習者のコメント等からの影響で長期間保持されるコアビリーフと呼べるものがある一方で、組織内での立場の変化、担当レベル・クラスの変更、インターネットの普及等、その時期の要因が影響して一時的に表面に現れたり、強化・変容したりするものもあることがわかった。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on Thai Japanese-language teachers’ beliefs on "good Japanese language teachers" and attempts to clarify the process and variables of forming and changing the beliefs. It consists of (1) longitudinal studies on four Thai Japanese-language teachers (two novice teachers and two mid-career ones) , and (2) interviews with four teachers (two mid-career teachers and two experienced ones). The main finding is that while some beliefs remain for long periods, which can be called core beliefs, some temporarily appear on the surface, change or get reinforced, and are affected by various factors at that moment such as the change in position in the organization they belong to and/or levels and classes to teach, and the spread of internet. As for the core beliefs, they show influences from factors such as these teachers' experience as learners, their training as teachers, and comments from their students.

研究分野：日本語教育

キーワード：ビリーフ　変容　ノンネイティブ日本語教師　タイ　PAC分析　縦断的調査　複線経路・等至性モデル　発生の三層モデル

１．研究開始当初の背景

国際交流基金によると、2009 年現在、海外 133 カ国・地域で日本語教育が行われ、学習者数、教師数とも増加している。さらに留学生 30 万人計画の実施により、海外における日本語教育の質の向上を目指して、43 カ国 116 カ所に日本語教育拠点が設置されている。こうした中で、日本語教師の育成・成長、教師教育の充実といった教師の質の向上が大きな課題である。

海外の日本語教育の多くは日本語を母語としない日本語教師（以下、NNT）を中心に、NNT と日本語を母語とする日本語教師（以下、NT）の協働により行われていると考えられるが、先行研究によると、NT より NNT の方が正確さ志向が強いなど、NNT と NT のビリーフには各々特有の部分があり、両者がよりよい協働を実現し、効果的な教育を行うためには、互いのビリーフを理解する必要がある。また、各地で教師研修が実施されているが、研修側が研修の目的と NNT のビリーフの相違を知っておくことは、より効果的な研修の実施に繋がると考えられる。

筆者らは、継続して日本語教師のビリーフに関する研究を行ってきた。ビリーフに関する先行研究は質問紙調査が中心だが、質問紙では調査者の念頭にない項目が調査できない。また、半構造化インタビューでも大きく枠組みを超える発話は引き出せず、背景も掴みにくいという課題がある。そこで、前科研費研究「量的・質的ビリーフ研究から海外ノンネイティブ日本語教師の研修に必要なものを探る」(2009～2012 年度基盤研究(C))（以下、前科研）では、ビリーフやそれが生成された背景を知るには、内在する意識を探る必要があると考え、質問紙調査と個人別態度構造（Personal Attitude Construct :PAC）分析（内藤 2002）という質的調査の手法を併用して、タイ、韓国、中国の新人教師・経験教師を対象にビリーフ研究を行った。

この中で、タイにおける調査からは、新人教師・経験教師に関わらず、タイ人教師は学習者と深く関わろうとしており、学習者を理解し、学習者の立場に立って考えようとする意識が強く見られ、それが「学習者中心」として語られることが多いということが明らかになった。また、新人教師 2 名については、教師研修の前後に調査を行ったが、そこからは、これらの教師が、研修で得たヒントを元に授業改善を行っていること、その成否を学生の反応などから判断し、効果を上げたと捉えていること、今回の授業改善で満足せず、さらに学び続ける意欲を持っていること、研修前に持っていた問題意識が研修で刺激され、発展した可能性があることが明らかになった。

前科研の結果からは、ビリーフ要因だけでなく背景や質問紙調査とのずれなどが見え、この手法によりビリーフがよりよく見えるとの感触が得られた一方で、研修や協働に資する知見にするには、ビリーフの形成や強化・変容を丁寧に見る必要があるという気づきを得た。特にタイの教師研修前後のデータからは、ビリーフの変容等は各教師の背景や置かれている状況との関わりの中で起こるため、研修から同じ刺激を受けても、それがビリーフにいつどのように現れるかは個人差があることが見て取れた。従って、ある一時期の研修前後の調査のみでは、その影響について断じることは難しく、また、現場での教授経験、同僚との関わりなど、何がどのようにビリーフの変容と関わるかを分析するには、研修期間外も含めて通時的にみる必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究では、前科研の調査実施国のうち、タイを対象として事例研究を行い、大学で教える NNT のビリーフの形成、強化・変容とその要因について探ることを目的とした。その上で、ビリーフ変容過程を明らかにする縦断的な研究手法のモデル化を図る。

タイは高等教育機関で学ぶ学習者が占める割合が高く、高等教育機関における教師の中の NT が占める割合が 41.8%と半数近くで（国際交流基金 2011）、NNT との様々な協働の場があると推測されることから、タイ人 NNT を対象とした。

具体的には、以下の 3 つを目指した。

(1) 前科研で調査対象となったタイ人新人教師（当時）をさらに縦断的に見ていき、様々な経験（研修参加、大学院進学、学習者や同僚との関わり等）がビリーフにどのような影響を与えるか、どのように成長していくのか、つまり、成長の要因、ビリーフの変容等のきっかけは何かを探る。

(2) 事例の多様性を持たせるため、(1)の前科研の対象の他にも新たな新人教師を対象として、同様に縦断的調査を実施する。

(3) 中堅・経験教師を対象に、ライフヒストリー的にこれまでの自分を振り返ってもらい、ビリーフの変容等とその要因を調査する。中堅・経験教師から重要な節目についての聴き取りを行い、結果を質的に分析して図式化することで、仮説生成を図る。それにより、新人教師の変容の今後を予測する上で参考になる視点が得られる可能性があると考える。

３．研究の方法

PAC 分析では、「いい日本語教師」とはどのような教師かの意識を引き出す刺激文が必要だが、まず、ビリーフの形成・変容やそれに影響を与える要因を引き出すのに適した刺激文を作成した。

タイ在住の研究協力者の協力も得ながら、調査対象者を選定し、以下の方法で調査を実施した。

(1)前科研で調査対象となったタイ人新人教師（当時、現在は中堅教師）（以下、前新

人教師）2 名、および新たに協力を依頼した新人教師（調査開始時に日本語教師歴 1 年以内）2 名を対象に、ほぼ半年に 1 回、計 3～5 回の「いい日本語教師」に関する PAC 分析調査を実施した。縦断的調査終了後に、それまでの調査内容に関するフォローアップインタビューを行った。

(2) 中堅・経験教師を対象に、まず「いい日本語教師」に関する PAC 分析調査を実施した。その結果を分析し、TEM（複路径路・等至性モデル）（安田・サトウ 2012）の手法を援用することによって図式化したものを示しながら 2 度のインタビューを行い、図を完成させていった。また、TLMG（発生の三層モデル）を参考に、ビリーフを行動・出来事・状況の段階（第 1 層）、そこから何かしらの気付きを得た段階(第 2 層)、それがビリーフとなった段階（第 3 層）の 3 層に分けて分析した。

４．研究成果

前新人教師 2 名及び新人教師 2 名に対する縦断的調査、中堅教師 2 名、経験教師 2 名のインタビュー調査の結果を分析した。以下では、これまでに得られた成果について報告する。

(1) 前新人教師、新人教師に対する縦断的調査

前新人教師 A については、前科研の 2 回を含め、計 7 回の縦断的調査、及びフォローアップインタビューの結果について分析を行った。7 回の調査全てで語られたのは、＜面白い教え方・教材＞＜授業後の反省＞＜学習者に対する指導・助言・問題解決＞、6 回で語られたのは、＜授業準備＞＜学習者の立場(学習者中心)＞＜学習者の観察＞＜高い日本語力＞等に関するビリーフであった。これらは学習者体験、教師 1 年目に受けた研修、学習者からのコメントや職場環境からの影響を受けて生じた後、約 6 年間保持されて強固なビリーフとなっており、教師 A のコアビリーフであると言えよう。一方、出現してすぐに消えるものもあった。本科研の 1 回目の調査前に教師 A は組織内でコーディネーターになり、後輩も増えたことから、＜先輩の授業見学＞＜先輩に相談＞＜学科内におけるリーダーシップ・コーディネーター＞等、それが影響したビリーフが多く出現したが、その後の調査では出ていない。また、＜教師は学習者のモデル＞というビリーフは日系企業に就職した卒業生を意識したもの、＜試験・宿題は教えた内容から＞は他の教師に対する学習者の不満によるものだが、1～2 回出た後に消えている。

このように、教師 A のビリーフには、6 年間保持されたコアビリーフと呼べるものがある一方で、直近の出来事や環境変化が影響して一時的に表面に現れたものもあった。

次に、前新人教師 B が全体を通して語っていたのは、＜学生からの信頼＞＜学生の問題を理解し、助ける＞＜教師の頑張り（まじめ・努力・あきらめない）＞等で、全調査を通じて、教師自身の能力・資質や教え方、教師と学習者との関係に関するものがほとんどであった。前新人教師 B は前新人教師 A と同じ大学に所属しているが、その立場の違いから、前新人教師 B からは組織内での自らの役割に関する言及は見られなかった。

新人教師 C は、＜日本語の知識＞＜学習目標の理解＞＜授業の中の柔軟性＞＜時間を守る＞＜授業後の反省＞＜教師の明るさ・親しみやすさ＞＜学習者とのいい人間関係＞＜同僚との情報共有＞について、全体を通して語っていた。これらは自らの学習者体験や同僚教師、失敗体験、学習者の態度、日本への研修引率等から影響を受けて生じた後、約 2 年間保持されていた。2 回目以降、表面上現れなくなったビリーフや、新たに出現したビリーフがあるが、出現のきっかけは上記と同様で、同僚や学習者とのやり取りや教師としての身近な経験であった。

新人教師 D は 3 回の調査であったが、＜専門分野及び専門以外の分野に関する知識＞＜学習者との友達のような関係、相談相手＞＜高い日本語力＞＜社会常識、社会での生活の仕方を教える＞という意識は 3 回全てにおいて見られた。これらは自らの学習者体験、同僚教師、教師経験、大学院の授業担当等がその要因となっていた。2 回目以降にも様々なビリーフが新たに出現しているが、上記の要因以外に、学習者からの授業評価や公的な場での発表経験等が影響して、授業評価で厳しい点を付けられないようにする意識が現れ、公的な場でスピーチができるぐらいの日本語力が必要だと感じるようになっている。

以上の縦断的調査の結果からは、自らの学習者体験、教師研修、同僚教師、教師経験、担当する授業、学習者の態度・コメント、職場内での立場の変化、職場環境、日本への研修引率、公的な場での発表経験といった要因が、ビリーフの形成に影響を与えていることが明らかになった。また、長期にわたって保持されるコアビリーフと呼べるものがある一方で、ある要因から影響を受けて一時的に表面に現れるものもあることがわかった。

(2) 中堅・経験教師のインタビュー調査

中堅・経験教師については、各１名について分析を行い、成果を発表している。

まず、中堅教師 E については、インタビュー結果から、第１期：学習者時代、第 2 期：教師 1 年目、第 3 期：教師 2～3 年目、第 4 期：教師 4～7 年目の４つの時期に区分されることがわかった。第 1 期の学習者時代は、学生の立場から教師を見ており、教師の知識や発音を含めた能力への意識が見られた。また、学習者に寄り添う教師像を求めており、学習者のレベルにあった説明、教師がよく笑うこと、フィードバックは学習者の意図を酌んで行うべきであるという意識が語られて

いた。第 2 期には、まだ対学習者的なものは見られず、自国にあった教材を作れるといい、教授法の知識があるといいといった、自分が授業をする際にまず必要なことへの意識が強く出ていた。第 3 期は、担当する学習者、クラスでの体験、学習者アンケート、チームティーチングで組んでいる教師(NT 含む)等、他者との関わりから出てきたビリーフが増加していた。例えば、タイ語をうまく使って説明するのがいい、知識だけでなく伝え方も重要である、発音によって意味が変わることがあるので発音も大切であるといったものである。また、自分のマイナス点への気づきも見られ、それを克服しようとし始めたのがこの時期である。さらに、対学習者ビリーフも出現し、学習ストラテジーを身に付けさせることが大事だ、クラスの中でついていけない学習者は個人指導が必要である、などが語られていた。第 4 期になると、コース全体、大学入学前、他大学への意識、学習者に寄り添う意識の強化、柔軟性の必要性、言語知識の必要性、実際の言語使用への意識、SNS の効果といったビリーフが出現する。これらは、学科長や全てのレベルの担当経験、卒業生送り出し、セミナー参加、テキスト作成等、より広い経験、視野から出てきたもの、あるいは、インターネットや SNS の普及、学習者の変化、教育制度の変化など、様々な環境変化によって生じたものであった。

中堅教師 E のビリーフの中から、特に、一度出たビリーフがさらに強化されたもの、あるいは、後に変容したり揺れたりしたものについて、TLMG（発生の三層モデル）を援用して分析を行った。強化の 1 例を挙げると、「教師は学習者のレベルに応じて、疑問に対する説明をしたほうがいい」というビリーフは、まず、第 1 期の自分が学生だった頃に、語彙の違いに対して納得できる説明が得られなかった経験から、「語彙の違いに対して今のレベルでわかる説明がほしい」という気付きを得、このビリーフを持つに至る。その後、第 4 期に「日本語の構造」の授業を担当し、テキストを作成するとき、「日本語学や言語学の知識があると、学習者にどれぐらい教えたらいいかわかる」という気付き、初級から上級のレベル全てを経験してから、「全体像とレベルを把握したら、各レベルでの教え方

中堅教師Eのビリーフの強化＜例＞

第三層 ビリーフ:教師は学習者のレベルに応じて、疑問に対する説明をしたほうがいい

時期	第一層 行動･出来事･状況	第二層 記号（気付き）
第1期	語彙の違いに対して納得できる説明が得られなかった	語彙の違いに対して今のレベルでわかる説明がほしい
第4期	「日本語の構造」の授業担当、テキスト作成	日本語学や言語学の知識があると、学習者にどれぐらい教えたらいいかわかる
第4期	初級から上級のレベルすべてを経験	全体像とレベルを把握したら、各レベルでの教え方がわかる

がわかる」という気付きを得、このビリーフが強化されるきっかけとなっている。

変容の例としては、第 2 期に、日本滞在経験なしでも発音や教え方が上手な先生を見て、タイでの情報(本など）だけでも十分であり、日本滞在経験は必ずしも必要ではないと考えるが、第 4 期には、上級の授業を担当し、日本へ留学する学生も多くいることから、日本滞在経験がないと学習者の言葉に反応できない、インターネットからの情報だけでは自信が持てないと感じ、「日本滞在経験がないと学習者に対して自信が持てない」と考えるようになっている。

中堅教師Eのビリーフの変容＜例＞

日本滞在経験は必ずしも必要ではない

第2期	日本滞在経験なしでも発音や教え方が上手な先生	タイでの情報(本など)だけでも十分だ

日本滞在経験がないと学習者に対して自信が持てない

第4期	上級の授業を担当 日本へ留学する学生	日本滞在経験がないと学習者の言葉に反応できない インターネットからの情報だけでは自信が持てない

経験教師 F についても、第 1 期：学習者時代、第 2 期：教師になってから博士留学前、第 3 期：博士留学後～学科長就任前、第 4 期：学科長時代、第 5 期：学科長退任後、第 6 期：最近（2009 年ぐらい～）という時代区分で、同様に分析を行った。

第 1 期は、学習者としての経験から、日本人とのコミュニケーション、自然な日本語・発音への意識といった実際のコミュニケーションへの意識が見られた。第 2 期には、学習者理解、日本語能力や日本社会・文化の知識といった教師の能力への意識、学習の雰囲気、学習者との関係作り、文法説明書の必要性、NT のフォローの必要性といった授業をするのに必要なことへの意識が現れるが、これらは学習者の反応や他の教師との接触によるものであった。第 3 期には、日本留学はコネクションを作るのに役立つ、研究と教育は違うといった留学体験が関係しているものや、既習者も未習者も同じ基準で評価する、授業内容について学生の意見を聞くといった、高校における日本語クラスの増加、担当クラスの変更が影響しているものが新たに出現している。第 4 期は学科長就任、カリキュラム改正等、より広い経験をすることで、組織内での勉強会・情報交換の必要性、日本の大学や日本人とのネットワーク作りの必要性、公の場で話せる日本語力、既習者と未習者の異なる基準による評価、大学の名声への意識が出てくる。また、担当レベルの変更等から、学習者と情報交換できる環境づくり、教室外の活動への意識も見られるようになった。第 5 期は、教室コントロール、学習者を引っ張るという意識が見られる一方で、学習者と交渉して内容を考えるといった学習

者中心の意識も見られる。第 6 期になると、学習者自身に調べさせる、学習者が自分の力を伸ばせるようにするという意識のように、インターネットや SNS の普及、社会全体の教育環境・教育観の変化による影響が強く見られる。また、死ぬまで付き合える日本人の友人の必要性や仕事と生活のバランスのような経験の長さから生じたと思われるものもあった。

中堅教師 E、経験教師 F の結果からは、自然な日本語・発音への意識、日本社会・文化の知識、学習者の能力・レベルを意識した教え方、活動を取り入れること、臨機応変・柔軟性が共通したビリーフとして確認された。また、学科長経験がビリーフに大きな影響を与えていること、NT とのチームティーチングから NT のフォローの必要性を感じていること、教師になった初期の段階では、学習者との関係作りや学習の雰囲気を尊重していること等の共通点が明らかになった。

このように時間軸に沿って分析することで、時間の経過の中で、ビリーフが発生するまでに影響を与えている要因を可視化し、強化したり変容したりするビリーフがあることが明らかにでき、本研究手法の有効性を確認することができた。また、何年ぐらいで、どのような経験によってどのような意識を持つのかの一事例を示し、年数以外にビリーフに影響を与える要素の例を示すことができた。このような事例の積み重ねが、協働する教師の相互理解に役立ち、また、研修担当者や組織の責任者が教師教育をする際の、コース運営の参考となるのではないかと考える。

(3)今後の展望

今後は、縦断的調査の結果、及び残りの中堅・経験教師各 1 名についてさらに分析を進める。また、これまでは各教師について総括的に分析を行ってきたが、特定のビリーフに焦点を絞り、複数の教師の結果からビリーフ変容を図式化したいと考えている。さらに、縦断的調査の結果と中堅・経験教師とをあわせた分析も行う予定である。

＜引用文献＞

① 国際交流基金、世界の日本語教育の現状―日本語教育機関調査・2009―、2011
② 内藤哲雄、ナカニシヤ出版、ＰＡＣ分析実施法入門［改訂版］、2002
③ 安田裕子、サトウタツヤ、誠信書房、TEM でわかる人生の経路―質的研究の新展開、2012

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 坪根由香里、嶽肩志江、八田直美、小澤伊久美、タイ人の新人日本語教師と経験日本語教師に共通して見られる「いい日本語教師」に関するビリーフ、PAC 分析研究、査読有、1 号、2016（掲載決定）
② 坪根由香里、小澤伊久美、嶽肩志江、八田直美、「実践的な日本語」「考えさせる授業」を意識する中国人日本語教師―その背景と彼らが目指す授業―、大阪観光大学紀要、査読無、16 号、2016、33-42 http://library.tourism.ac.jp/No16tsuboneyukari.pdf
③ 坪根由香里、嶽肩志江、小澤伊久美、八田直美、「いい日本語教師」に関する中国人新人教師のビリーフ―PAC 分析の結果から―、大阪観光大学紀要、査読無、15 号、2015、33-42 http://library.tourism.ac.jp/No15tsuboneyukari.pdf
④ 坪根由香里、小澤伊久美、嶽肩志江、中国人経験日本語教師の「『対学習者』ビリーフとその背景を探る―『いい日本語教師』に関する PAC 分析の結果から―、大阪観光大学紀要、査読無、14 号、2014、59-68 http://library.tourism.ac.jp/No14tsuboneyukari.PDF
⑤ 小澤伊久美、嶽肩志江、坪根由香里、ある日本語授業についての経験日本語教師 A の語りとその背景にある意識―マルチメソッドによる分析―、ICU 日本語教育研究、査読有、10 号、2014、3-24 https://icu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2216&item_no=1&page_id=13&block_id=17
⑥ 坪根由香里、小澤伊久美、八田直美、韓国人経験日本語教師のビリーフを探る―『いい日本語教師』に関する PAC 分析の結果から―、大阪観光大学紀要、査読無、13 号、2013、43-54 http://library.tourism.ac.jp/No13Tsuboneyukari.PDF

〔学会発表〕（計 10 件）

① 坪根由香里、八田直美、小澤伊久美、タイ人日本語教師 A のビリーフの形成と変容―PAC 分析による縦断的調査から―、BALI-ICJLE2016 日本語教育国際研究大会、2016 年 9 月 10 日、バリ（インドネシア）（発表決定）
② 坪根由香里、内田陽子、小澤伊久美、八田直美、経験タイ人日本語教師Ｂの「いい日本語教師」に関するビリーフの変容とその要因、タイ国日本語教育研究会第 28 回年次セミナー、2016 年 3 月 19 日、バンコク（タイ）
③ 坪根由香里、小澤伊久美、八田直美、イ人日本語教師 A のビリーフ―PAC 分析による縦断的調査から―、2015 年度日本語教育学会秋季大会、2015 年 10 月 11 日、

沖縄国際大学（沖縄県宜野湾市）

④ 坪根由香里、小澤伊久美、嶽肩志江、八田直美、中国人新人・経験日本語教師の「いい日本語教師」に関するビリーフ―PAC 分析の結果に見られる共通点と相違点―、第 24 回小出記念日本語教育研究会、2015 年 7 月 4 日、国際基督教大学（東京都三鷹市）

⑤ 坪根由香里、小澤伊久美、八田直美、中堅タイ人日本語教師Aの「いい日本語教師」に関するビリーフの変容とその要因、タイ国日本語教育研究会第 27 回年次セミナー、バンコク（タイ）

⑥ 八田直美、小澤伊久美、坪根由香里、嶽肩志江、「いい日本語教師「に関する中国人新人教師のビリーフの特徴―日本、日本文化に対する意識を中心に―、シドニー日本語教育国際研究大会、2014 年 7 月 11 日、シドニー工科大学、シドニー（オーストラリア）

⑦ 坪根由香里、嶽肩志江、小澤伊久美、八田直美、「いい日本語教師」に関する中国人新人教師のビリーフの特徴―経験教師との比較から―、第 23 回小出記念日本語教育研究会、2014 年 7 月 5 日、国際基督教大学（東京都三鷹市）

⑧ 坪根由香里、小澤伊久美、嶽肩志江、中国人経験日本語教師の「対学習者」ビリーフとその背景を探る－「いい日本語教師」に関する PAC 分析の結果から－、2013 年度 日本語教育学会秋季大会、2013 年 10 月 13 日、関西外国語大学（大阪府枚方市）

⑨ 嶽肩志江、八田直美、小澤伊久美、坪根由香里、中国人経験日本語教師 A のビリーフとその背景を探る－「いい日本語教師」に関する PAC 分析の結果から－、日本質的心理学会第 10 回大会、2013 年 8 月 31 日、立命館大学（京都府京都市）

⑩ 小澤伊久美、嶽肩志江、坪根由香里、経験教師 A は授業活動を見て何に着目し、どう語ったか－授業についての語りとその背景にある意識－、第 22 回小出記念日本語教育研究会、2013 年 6 月 8 日、国際基督教大学（東京都三鷹市）

〔図書〕（計１件）

① 小澤伊久美、坪根由香里（分担執筆）、舘岡洋子 編、ココ出版、日本語教育のための質的研究　入門－学習・教師・教室をいかに描くか、2015、393（221-246）

６．研究組織

(1)研究代表者

坪根　由香里（TSUBONE YUKARI）
大阪観光大学・観光学部・准教授
研究者番号：80327733

(2)研究分担者

小澤　伊久美（OZAWA IKUMI）
国際基督教大学・教養学部・講師
研究者番号： 60296796

(3)研究協力者

内田　陽子（UCHIDA YOKO）
八田　直美（HATTA NAOMI）
プラパー・セーントーンスック（PRAPA SANGTHONGSUK）